

バレーボール協会

沿 革

戦後うちひしがれた国民の心を奮い立たせるかのように、各種スポーツが盛んになってきた。幕別のバレーボールも職場を中心として大会が開かれるようになってきた。当時、町内では、新田ベニヤチームが群をぬいており、山崎・本庄・加藤等名選手を揃えた同チームは、十勝の大会を制覇して全道大会に駒を進めること2回、立派な足跡を残している。

昭和26年の春、バレーをやろうと各職場に呼びかけてチーム作りを進めた。新田ベニヤ・町役場・幕別中・幕別小の4チームが結成されたので早速大会を開いた。

当時のバレーは、9人制だけでしかも、屋外コートでするものとなっていた。第1回大会を幕小校庭で開いたが、物珍らしげに観衆も多くコートをぐるりと取りまいて、物凄い声援だった。役場チームが優勝したが、この大会を機にして俄然バレー熱が高まってきた。

その後、幕別農協・札内農協・幕別高校・統内開発或いは、幕別局と拓銀の混成、10指に余るチームが作られて大会を開くようになった。昭和27～32年頃は、毎年春と秋の大会を始め、労働文化祭・コート納め等、年4回位開かれた。日曜には選手が集まれないからと毎日終業後一試合をするリーグ戦を組んで、毎日暗くなってボールが見えなくなるまで選手も応援も夢中になってやったこともある。町内の大会が盛んになるにつれて、十勝大会参加の夢がふくらんで単独チームで、或いは、ピックアップチームで何回か参加した。



町役場選手一同



対池田高校選で中村(寛)選手のスパイク

こうして町村では唯一つ幕別チームのみが何年か十勝大会に参加したので、十勝協会はバレーの普及という意味を含めて幕別で十勝大会を開かないかと奨められ、おこがましくも引受けてしまった。幕小校庭にコート4面を造って、当日となったが肝心の地元選手が揃わなくて観衆の中から2人引張り出してやっと9人にして参加した。

バレー熱に浮かれて審判もと言うことになって、B級公認審判員の資格もとった。(役場小尾、幕高伊藤、中川) 幕中にはB級をもった先生が居た。

昭和38年 十勝青年大会に参加した。それ以前にも2～3年参加していたが記録がなくて不明である。以下青年大会を年を追って記述する。(小尾が男子チームの監督だったので、女子チームのことはよくわからない。)

昭和38年7月21日 十勝青年大会 帯広市 男子 4位

昭和39年7月25日 # 池田町 男子 3位

真夏の猛暑の中、清見ヶ丘コートでやったが暑くて上半身裸でやった選手もいた。伊藤(征)等、背が火ぶくれのようになって後が大変だった。大学の夏休みで帰省中の千賀も引張り出して参加した。

昭和40年7月18日 十勝青年大会 帯広市 男子 優勝

決勝は帯広市役所 - 幕別で行なわれ帯広が勝ったが、市役所は全道市役所大会に参加が決定していたので、この大会の参加資格がないことが後でわかり、幕別が優勝となった。

昭和41年7月17日 十勝青年大会 幕別町 男子 2位 女子 3位

8月20日 全道 # 富良野

十勝大会を幕別で開くことになり、各競技の会場作りに関係者は大変だった。幕中のグランド拡張整備、バレーコート作り等、皆の協力によって立派な施設となった。幕別で大会を開いたため、全道大会参加の十勝選手団の総監督を幕別(小尾)が押しつけられた。

昭和42年7月16日 十勝青年大会 本別町 男子 優勝

本別高校グラウンドで行なわれた。真夏の炎天下で選手は汗と埃で真っ黒になる。決勝は、池田チームと対戦し、山中 丸山のスパイク、クイックが面白い程決まった。千賀の変化球サーブも良く、ポイントをあげて、さすがの池田も顔色なしだった。戦い終って利別川に入って泥と汗を流したのも思い出の一つだった。



優勝状・優勝杯を手にした男子チーム

心配して寝たので……函館に負けたのも太鼓のせいだ、とほやいたが後の祭りだった。

このときのメンバー

監督 小尾 マネージャー 伊藤

選手 山中宏・佐藤幸・千賀浩・日諸・本田公
平田正 石田豊 伏見・丸山・塚本・笹井
山田先生

昭和42年8月3日 全道青年大会 長沼町
十勝代表として乗り込んだ幕別男子チームは、くじ運悪く、強豪函館チームと対戦、セットオールの未惜しくも敗れた。函館は決勝に進み準優勝したものだから、わが幕別の実力も相当のものと自信を持った。

前夜泊った寺の天井に大きな太鼓がぶら下がっていて、その下に寝たので、落ちてこないかなと



応援の女子チームを混じえて



女子チーム選手の一コマ



全道大会 長沼町にて選手と応援者一同



全道大会から帰町して 林主事と小尾監督と残念会

昭和43年8月11日	十勝青年大会	帯広市	男子 4位
昭和44年8月3日	#	士幌町	大雨で中止
昭和45年7月12日	#	芽室町	男子 3位
昭和46年7月11日	#	本別町	男子 優勝

輸入選手がいるとかいないとか審判から耳打ちされて、主将の山中が一寸あわてたが、決勝相手の池田も同じこと堂々と戦って優勝杯を手にした。

昭和46年8月8日 全道青年大会 士幌町 1回戦で敗る
主将山中外1名が負傷のため出場できず1回戦で敗れたのは残念だった。

昭和43年から道民スポーツ大会を兼ねて行なわれたため1～3位はメダルを貰えるようになった。
43年は年令別混成チームもあって年令別で3位となり銅メダルを貰った(監督 小幡)

以上が青年大会の概要である。

昭和38年から46年頃までは、毎年2回位町内の大会を開いた。

参加チームは、次の通り

町役場・新田ベニヤ・幕別高校・幕別中・幕別小・中央青年・西幕青年・南幕青年・札内開発
幕別農協

昭和52～53年度の概況

過去の全盛だったバレーボール熱が自ら消滅していった感じがしないでもない年だった。と云うの

は、年間行事予定には町内住民に呼びかけて実施する大会が10月に1回しかないという事であった。前会長の西山氏を中心にその善後策を考え十分検討を加えたことは論を待たない。しかし、町内的には細々とした組織でもファイトがあり根強さが蓄積されていたことが、小さな大会ではあったが行なわれていたということであり、社会体育の中でもママさんバレーは東部十勝大会では活躍し全十勝でも五指の中にランクされていた。青年男女についても忙しい中にあり東部大会には出場していた。

町内大会 昭和53年10月29日 8チーム参加(幕別高校)

男子 優勝→池田高 準優勝→西幕別青年 女子 優勝→札内ママ 準優勝→札中B
道民スポーツ東部予選

一般女子 2位 一般男子 3位 家庭婦人 優勝

その他、白人小学校・幕別小学校を中心にしたジュニアバレーボールの熱が盛んになり、昭和53年度の全十勝大会、西帯広大会では白人バレーボール少年団の優勝が目を見張った。

昭和54年度の概況

前年度までの経過と反省を十分参考にし、幕別バレーボール協会新役員が誕生した。次の諸氏である(敬称略)。

・会長 小尾丁二 ・副会長 西山 茂 ・理事長 駒沢義明 ・理事 日諸 勲・山中宏司・畑山弘子・武田良子・伊藤律子・佐藤佳裕・林 睦康・高山富治 ・事務局長 佐藤 清 ・事務局員 坂口惣一郎・水川 潔 ・監事 佐々木芳男・加藤義隆

2回、3回の役員会では町内住民にバレーボールを復活させ、町内大会の在り方、今後の方針等が討議された。毎週木曜日に幕別小学校で、火曜日・金曜日は札内スポーツセンターと札内中学校で午後7時～9時まで練習をし、駒沢・佐藤両先生の指導による「初心者によるバレー教室」の開設と着々底辺拡大の方向へ進めたのである。

11月4日(札内中学校)全町バレーボール大会 参加チーム 男子5、女子10、計15チーム
男子 優勝 → 葉山Aチーム 準優勝 → 札内教員チーム
女子 優勝 → 札内ママ 準優勝 → 札内中Aチーム 三位 → 札内中B・幕別中Bチーム
アトラクション 札内バレーボール少年団紅白試合(団員50名、指導 佐藤・五十嵐先生)

前年度より2倍の参加数、バレー協会と地教委のタッグマッチが盛大さを生み、次回大会(2月予定)への足がかりとなった。野球、ソフト……その他の協会運営に劣らず、バレーボール協会も一步一步と過去の全盛を再度実現したく努力したいと思っている。役員諸氏の責任が重い。

これからのバレーボールは、夏冬を問わず練習ができ(新設された学校の体育館・計画中のスポーツセンター)試合も多く望める筈である。指導技術の普及と審判員の養成と愛好者の増えることは、バレーボールがその地に深く根強く継続される事である。町内各公区の大会(年令別大会・男女混成)職域大会と予定をしているものの、実現は眼前である。少年団も十勝の5回の大会中、3回は優勝、2回は準優勝と輝かしい成績を収め、これが将来とも町の底辺として活躍され、十勝の幕別町としてのエネルギー源となって戴き、先輩諸氏に恥じない気がまえを持ち続けたいと願っている。バレーボールを通じ「輪を広げ和を大切に」町づくりの一助になろうとしている。